

学習塾選択にみる家庭の教育主導意識について

藤 沢 伸 介

POSITIVE POLICIES ADOPTED BY MOTHERS IN SELECTING *JUKU* SCHOOLS FOR THEIR CHILDREN

Shinsuke FUJISAWA

Atomi Gakuen Women's University, Niiza-shi, Saitama 352

Interviews were held with 192 mothers whose children are fifth to ninth graders in order to investigate the actual conditions of their utilization of *juku* schools.

The results were as follows. There has been a steady increase in the number of mothers who try to establish new educational environments for their children independent of their regular school education. Many mothers try to make their sons and daughters study harder by sending them to *juku* schools which harmonize with their educational philosophy, because children usually get out of their parents' control when they become maturer and more independent. Many of the mothers hope their children will study at good *juku* schools for the purpose of forming character, but when they select *juku* schools, their level of aspiration is very low because of the difficulties in judging the quality of each *juku* school in advance. There are many *juku* schools which pursue only profit at the sacrifice of the educational quality, but 73.4% of the mothers are satisfied with the teaching methods of the *juku* schools their children attend. Mothers who are very concerned about education, however, are not so satisfied with their *juku* schools even after they have carefully examined and selected them.

Some mothers allow their children to pick *juku* schools their playmates attend. In most cases, those mothers are not so concerned about education, and are satisfied with the *juku* schools if their children are willing to go to them.

A little over twenty percent of mothers expect *juku* schools to be institutions for forcing training for good marks or cramming for entrance examinations. But the *juku* schools do not always meet their expectations, and cause most dissatisfaction among the mothers who only expect their children's marks to improve rapidly.

42.7% of *juku* schools are of the exercise- and answer-checking type, where teachers only make students fill in exercise books and tell the correct answers to them afterwards instead of teaching the subjects systematically. It can be inferred that this is not done because it is an effective teaching procedure, but it helps cut down on personnel expenditures. Much dissatisfaction is produced by the mothers who send their children to such exercise- and answer-checking type *juku* schools.

In conclusion, it is certain that there is a trend among mothers forward establishing new educational environments independent of regular schools, but the intention seems to be far from realization at present.

Key words: *juku* school, mother's educational philosophy, junior high school students.

問題の所在

小中学生の学習塾に通う率は、調査年次によってその値が異なるが、一般には大都市程値が大きく、又年々その数は増加している。昭和51年度の文部省「児童・生徒の学校外学習活動に対する実態調査」によると、大都市で中学生が50～60%、小学生が20～30%であったが、それから10年後の昭和61年には、調査機関によってその値は異なるものの、中学生で70～80%に増加していると言われる。

かつては、塾を論ずる場合、学校制度を前提とした見方がなされるのが普通であった。そこでは、塾は、学校教育を補完する存在であったり、受験体制に対処するための必要悪という見方しか出て来ない。本論を発表している昭和61年現在でさえ、そのような見方は根強く残っている。

しかしながら、小中学生の通塾が当たり前となった現在、親の間には新しい意識が生まれつつあるように見える。それは、自分の子供の教育を公教育に100%委ねるのではなく、親が自分の方針で自分の子供の教育を考えようとする意識である。ここでは、学校は義務として通わせる機関、塾は自分の理想を実現させる機関という意味を持つてくる。

本研究は、塾選択行動を分析することにより、この新しい教育意識の質を検討することを目的とする。

調査の概要

調査時期	昭和60年7、8月
調査対象	無作為に抽出した、小5～中3の子供を持つ母親192名
調査方法	個人面接法(注1)
調査有効数(率)	191名(99.5%)
質問事項	付表参照(質問数は回答の種類によって異なる。)

サンプル構成

子供の学年 子供の性別	小学生計			中学生計			総計
	小5	小6	小計	中1	中2	中3	
男子	11	7	18	17	23	23	63
女子	16	16	32	18	29	31	78
計	27	23	50	35	52	54	141

結果と考察

1. 通塾率

今回の調査に於ては、通塾の状況はTABLE 1の通りであった。全体の通塾率は、他の調査とほぼ同じ傾向を示している。又、男子と女子では多少異っている点が見られた。

まず小学生では、男子の場合、小学5年よりは小学6年の方が通塾率が高くなっており、女子の場合はこれとは逆に、小学5年より6年の方が通塾率が低くなっている。中学生の傾向としては、男子の場合学年が上になる程通塾率が高くなるが、女子に関しては最上学年の中3では通塾率が減少している。従って、男子と女子では、親の考え方が異ると推論される。

又、中学1年では、男女共通通塾率は半分以下であるが、中学2年になるとどちらも急に通塾率が高まる。別の表現をすれば、約4割の家庭では、中1から子供を塾に通わせ、別の4割の家庭は中2から子供を塾に通わせている。

これは、均質な母集団が徐々に変化していく過程とも考えられるが、一方、子供を中1から塾に通わせる家庭と中2から通わせる家庭とでは親の考え方が初めから異っている可能性もある。

簡単に推論されることは、中2になって子供を塾に通わせる家庭では、中1では課外クラブの活動に時間を多く使っているうちに、成績があまり伸びないことに気付き、その対策として、中2から塾に子供を通わせることで、遅れを取り戻そうとするということである。中には初めから中2から通わせると考える家庭もあるかもしれないが、この様に途中で方針が変化する家が多いのではない。

いずれにせよ、通塾率のデータだけからでは何とも結論づけることはできないので、この件については次節で再び問題にすることにする。

さて、女子の最上学年における通塾率の低下の原因を検討するために、家庭教師につく率を調べたのがTABLE 2である。

塾だけに通っている率は中3の女子は減少しているが、そのかわり、家庭教師につく生徒が12.9%ある為、結果としては、塾も家庭教師も活用しない生徒は減少している。これは、学習塾に於て、通常中学3年のクラスは夜遅く組まれていることが多いため、女子には夜間の外出を控えさせ、外

TABLE 1 学年別・性別の通塾率（単位は％）

学年 性別	小5	小6	小学生 計	中1	中2	中3	中学生 計	総計
男子	36.4	57.1	44.4	47.1	78.3	82.6	71.4	65.4
女子	75.0	56.3	65.6	33.3	82.8	77.4	69.2	68.2
合計	59.3	56.5	58.0	40.0	80.8	79.6	79.6	67.0

TABLE 2 学年別・性別の塾・家庭教師の活用状況（単位は％）

		通塾のみ	塾と家庭 教師の 併用	家庭教師 のみ	塾も家庭 教師も活 用しない	合計
男 子	小5	36.4		9.1	54.5	100
	小6	57.1			42.9	100
	中1	47.1		11.8	41.2	100
	中2	78.3		8.7	13.0	100
	中3	73.9	8.7	13.0	4.3	100
	男子計	63.0	2.5	9.9	24.7	100
女 子	小5	75.0			25.0	100
	小6	43.8	12.5	12.5	31.3	100
	中1	33.3		11.1	55.6	100
	中2	82.8		6.9	10.3	100
	中3	77.4		12.9	9.7	100
	女子計	66.4	1.8	9.1	22.7	100
合計	64.9	2.1	9.4	23.6	100	

出せずに済む家庭教師を利用する家庭があるためと考えられる。

2. 非通塾の理由

これまでの多くの調査では通塾目的が調べられているだけで、通わない者が何故通わないかの調査は殆どなされたことがないように見受けられる。塾を必要悪と見做し、できれば通わない方がよいという価値観に基づく限り、通わないのが当たり前であり理由などあるわけではないが、本研究ではそのような価値観にとらわれない調査を意図している為、塾に子供を通わせていない親には、何故通わせていないかを尋ねることにした。

結果としては、21通りの回答が得られた。これらの回答の比較的近いもの同志を分類して、子供の学年別に集計したのがTABLE 3である。

1, 2は学校教育を充分信頼し、わざわざ塾に

通わなくとも学校を中心に生活を送ればよいとする考え方である。特に1の比率は、小学校中学校とも学年が上になる程減少し、中3には、この考え方はなくなってしまふ。

3～6は、積極的に学校中心の生活を考えるわけではないが、あえて塾のことを考える必要がないという、どちらかという消極的な学校信頼型の反応であるが、これも学年が上になると減少し、中2ではもうわずかになる。

ここまでの1～6は、学校を中心とした考え方であるのに対し、次の7～21は家庭主導型の反応である。7～10は、親が積極的に子供の教育方針を考え実行している反応であるが、これも中1迄で、中2以降は回答がない。11～13は、良い塾があって本人が納得すればすぐにでも塾に通わせたいという反応であり、これは上の学年でも反応が

TABLE 3 学習塾を利用しない理由

教育方針	なぜ子供を学習塾に通わせないか	小 5	小 6	中 1	中 2	中 3	
学校信頼型	積的 極	1. 必要性を感じない。学校だけで充分 2. 子供が部活で忙しい	36	20 20	24 29	10 40	
	消 極 的	3. 自由に遊ばせたい 4. 学習意欲なし 5. 子供がいやがる 6. 学校が禁止している	27 9	10 10	5 29 5	10	
家庭主導型	親 が 指 導	7. 親が指導可能 8. 他にやらせたいことあり 9. 自力で学習させたい 10. 時期尚早	18 18 9	10 10 10	10 5 5		
	塾 を 待 機	11. 子供が通うと言い出さない (言えばすぐ通わせる) 12. どういう塾が良いのかわからない 13. 近くに良い塾がない(検討中)	9	30	10 5	40 10	9 36
	学 習 塾 以 外 の 選 択	14. 家庭教師をつけている 15. トレーニング教材をやらせている 16. 通信教育をやらせている	9	20 10	19 5	30	64
		17. 塾は効果があると思えない 18. 上の子は塾で効果がなかった 19. 塾は非行につながる 20. 塾は遊び半分になる 21. 塾に通わせると、家族で 話合いの時間がなくなる	9		10 5	20 20 10	
	(総 回 答 数)		(11)	(10)	(21)	(10)	(11)

数値はその学年の総回答数に対する比率。単位は複数回答を認めているので合計は100にならない。但し、総回答数のみ実数

ある。14~16は、塾以外の教育システムの活用で、特に家庭教師の利用は、学年が上になる程比率が多くなっている。17~21は、塾に対して否定的な態度を表明した反応で、少数例からの不適切な一般化と思われるが、中2の親に集中しているのは興味深い。

全体的にTABLE 3を見た時に気付くのは、中1と中2の所に大きな質の変化が見られることである。これは、多分子供の発達に関係があるであろう。中学2年になると、子供は大きく自立への道を歩み始める為、親が子供に何か説得しようとしても、なかなかかかつてのようには言うことをきかない。親が教育の主導権を取ろうとしてもうまくいかないが、かといってきちんと勉強だけはさ

せたいということで、その方針の実現を塾という教育機関に託すのではないかということが推論される。

いずれにせよTABLE 3を見る限りにおいては、学校信頼型の反応と家庭主導型の反応を比べると、これは複数回答を認めているので単純に反応数を合計することはできないが、家庭主導型の反応の方がはるかに多い。^(注2)

通塾者が学校教育だけでは不十分と考えているのは当然として、非通塾者でさえも学校信頼型の反応が少ないということは注目し得る。

それでは、どのような点で学校が信頼できないのであろうか。言いかえれば、親が塾を活用しながら子供に与えたいのはどのような教育なのであ

ろうか。これまでしばしば言われてきたのは、塾は受験制度があるために存在している機関であるということである。もしそうであるとするなら、親が塾に期待する内容は効果的な受験指導のみであろう。そこで、通塾者に対して、理想的な学習塾とはどのような所であるかを質問した。

3 学習塾の理想像

通塾者を対象として尋ねた学習塾の理想像としては、57通りの回答があった。これを整理したのがTABLE 4 である。調査者の主観性を排除する為、内容がほぼ等しいと思われる項目であっても、表現が異なれば別の項目として集計してある。表中の数値は、回答者数に対する百分率である。回答は1人が何項目も考えている場合があるので、数値の合計は100%にはならない。大きな分類は、筆者が同傾向と考えた項目を同群にした分類である。各群につき百分率の検定を行った結果、小学生の親と中学生の親では期待内容に有意差はなかったため、両者に関してはほぼ同様の傾向があると見ることができる。

Cの「速効性と結果の重視」の群と、Bの「人格形成と過程の重視」の群の両方にわたって回答を出したケースはなかった。Aの「親身の個別対応の重視」については、他のどの群にも跨がった回答が多数見られた。内容的に見ても、B群とC群は明らかに矛盾すると考えられる。例えば3と6は29と逆になっているし、4と27や37も逆である。マスコミで話題にされる「学習塾」は、Cの方針をとるものとされることが多いが、今回の調査で見限りにおいては、約2割の親が速効性と成績上昇という結果を塾に期待し、約4割の親が人格形成と本来の学力増強を塾に期待していることがわかる。又、約半数の親は、面倒見の良さや自分の子供の学力に適した指導を望んでいる。

これらの結果は何を意味しているであろうか。1つの可能性は、^(注3) 現在通っている塾の現状に不満が多く、その満たされない部分が回答となって出てきているということであろう。これについては、塾選択や満足度の調査結果との関係を見なければ何も言えない。又別に、これは学校教育に対する不満をそのまま表わしているという可能性もある。科学的論証は難しいが、調査を通じての筆者の印象としては、この可能性はかなり高いようである。塾の理想像の調査にあたり、回答の際の親の代表的なコメントを2つ紹介する。

1. 勉強面では、本人が理解できるまで教え込んでくれる塾が理想だが、ただ受験のためにというわけではない。個性を尊重した上での指導がなされていない学校教育の現状に失望しているので、塾にそれを期待せざるを得ない。学校では生徒全員に目が向けられておらず、塾の方がまだましである。塾は、親の学校教育に対する不満のはけ口である。(中3生の母親, 埼玉県)
2. 学校での授業は多人数で、どうしても行き届かない所がある。そういう所を塾でカバーして成績向上へつながって欲しいと思っているので、少人数制の塾が理想的であると思う。(中3生の母親, 東京都)

どちらも、学校教育に対する不満が強く述べられている。

又、B群C群という相容れない回答が得られたということは、母集団が均質ではなく、教育方針によって、母親にはいくつかの類型が潜在的に存在していることを示唆しているように思われる。もし、類型の存在が明らかになれば、親の子供時代の成績、親の学歴、子供の学業成績との関係も見出せるかもしれない。

4 学習塾の選択者

前節において、母親達が学習塾に対してかなりの期待を持っていることがわかったが、そのように期待している塾を誰が選んでいるかを見たのがTABLE 5 である。全体的に見ると、約半数は母親が選び、約4割は子供本人が選んでいる。両親

TABLE 6 誰が学習塾を選択したか (単位は%)

学習塾選択者	小5	小6	中1	中2	中3	合計
母親	75.0	53.8	30.8	50.0	41.0	47.8
本人	16.7	30.8	53.8	36.1	48.7	39.8
母親と本人		7.7	7.7	8.3		4.4
両親			7.7	2.8	2.6	2.7
両親と本人				2.8	5.1	2.7
父親	8.3	7.7				1.8
兄弟					2.6	0.9
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
有効回答比率	75.0	100.0	92.9	85.7	90.7	88.3

TABLE 4 通塾者の親の考える学習塾の理想像

分類	項目	子供の段階			小学生	中学生	全体	
		小学生	中学生	全体				
指	A 親身の 個別対応 の重視	1. 子供がわかるまで教える		10.1	7.8			
		2. 能力別に指導の仕方を変える	10.3	5.1	6.3			
		3. 個人指導の時間がある		8.1	6.3			
		4. 少人数で指導の目が行き届く	10.3	5.1	6.3			
		5. 個人個人の弱点補強をしてくれる	3.4	6.1	5.5			
		6. レヴェルが自分の子供に合っている	3.4	5.1	4.7			
		7. 子供の個性を尊重して指導してくれる		5.1	3.9			
		8. 教師中心でなく一人一人生徒の現状を把握しながら指導する		4.0	3.1			
		9. 先生が子供の話をよく聞いてくれる		2.0	1.6			
		10. 子供の疑問にいていねいに答えてくれる		2.0	1.6			
		11. 授業のアフターケアを責任をもってやる	3.4	1.0	1.6			
		12. すべてをまかせられる(他に家庭教師など不要)	6.9		1.6			
		13. 子供と相性が合う		1.0	0.8			
		14. どんなレヴェルの子供にも合う	3.4		0.8	41.4	54.5	51.6
導	B 人格形成 と過程の 重視	15. 学習意欲を高めてくれる	6.9	11.1	10.2			
		16. 子供が喜んで通うようにしてくれる	10.3	5.1	6.3			
		17. 学習順序や説明がわかりやすいよう配慮されている	17.2	2.0	5.5			
		18. 学習の楽しさを教える	3.4	3.0	3.1			
		19. 適切な学習法が身につく		3.0	2.3			
		20. 個人差を理解し、人間性を大切に育てる		3.0	2.3			
		21. 子供の個性や能力をうまく引き出す		3.0	2.3			
		22. テストは心要最少限にとどめ競争心をあおらない		2.0	1.6			
		23. 勉強を好きにさせる	3.4		0.8			
		24. 本来の学力を付ける		1.0	0.8			
		25. 学習内容を人生に於いて主体的に活用できるようにする		1.0	0.8			
		26. 子供の知的好奇心を刺激する		1.0	0.8			
		27. 勉強を通して人間としての生き方を教える		1.0	0.8			
		28. つめこみ教育をしない		1.0	0.8			
針	C 速効性と 結果の 重視	29. 精神力や自主性を養う		1.0	0.8			
		30. 自律性を養う		1.0	0.8			
		31. 受験勉強の機会を活かして心を鍛える		1.0	0.8	41.4	40.4	40.6
		32. 学校の成績が上がる	13.8	13.1	13.3			
		33. 受験で成功させる	3.4	3.0	3.1			
		34. テストが頻繁にあり絶えず結果がわかる	3.4	2.0	2.3			
		35. 子供に厳しく接し、言うことを聞かせる		2.0	1.6			
		36. 一流校合格の実績がある		2.0	1.6			
		37. 多人数の中で競争心をあおる		1.0	0.8			
		38. 学校の定期考査で点がとれるよう準備する		1.0	0.8	20.2	24.2	23.4

分類	子供の段階			小学生	中学生	全体	小学生	中学生	全体	
	項目									
形態	D 授業計画	39. 授業計画が学校の勉強にも受験準備にも合うように立てられている			3.4	4.0	3.9			
		40. 学校と進度が同じ			3.4	2.0	2.3			
		41. 学校より進度は早目			3.4	1.0	1.6			
		42. 学校より進度は遅目				2.0	1.6			
		43. 授業計画がきちんと立てられている				1.0	0.8			
		44. 学校のように型にはまらず授業計画が臨機応変				1.0	0.8			
	E 教師	45. 教師が熱心、真剣（態度）				5.1	3.9			
		46. 教師が優秀（能力）				2.0	1.6			
		47. 教師が探究心旺盛（資質）				1.0	0.8			
		48. 熟練教師が多い（経験）				1.0	0.8			
	F その他	49. 充分設備が整っている				2.0	1.6			
		50. 受験情報が豊富				1.0	0.8			
		51. 営利目的でなく貢献目的の設立である				1.0	0.8	1 0.3	2 4.2	2 1.1
	雰囲気	52. 質問しやすい雰囲気				2.0	1.6			
		53. 厳しさ、易しさの度が適度				2.0	1.6			
54. 伸び伸びと勉強できる雰囲気			1.0		0.8	3.4	4.0	3.9		
個人的都合	55. 授業料が安い			3.4	3.0	3.1				
	56. 自分の家に近い			3.4	2.0	2.3				
	57. 夜遅くならない			3.4	3.0	0.8	1 0.3	5.1	6.3	
(総 回 答 数)							(29)	(99)	(128)	

・数値は、総回答数に対する比率。単位は%。複数回答を認めているので、合計は100にならない。総回答数は実数。

相談の上で選択したり父親が選択している例は、非常に少ない。

又、年齢別に見ると、年齢上昇に伴い本人選択が上昇という大きな傾向はあるが、その経過は必ずしも単純でない。百分率で見ると、小5、小6、中1と本人の選択率が高まるが、中2の時期には母親の選択が多くなっている。このことをTABLE 3の結果と総合すると、次のようなことが推論される。即ち、中2の時期は中学時代の中だるみの時期とよく言われるが、母親が子供に学習意欲欠如の傾向を見出し、子供に学習するように小学校時代と同じように促すものの、子供の方は親からの自立の傾向が出はじめている為、なかなか親の思い通りにならない。そこで、母親が学習塾に通わせることで勉強させようとするという形になるのではないだろうか。これを確認する為には、更に別の調査が必要であろう。

では、母親や子供は、実際に学習塾を選択する時、どこに着目して選択するのであろうか。その

点を、次節で検討することとする。

5 学習塾の選択基準

現在通塾中の学習塾の選択基準を尋ねた回答を多い順に整理したのがTABLE 6である。理想の塾の所では指導方針や形態について、さまざまな期待が述べられ、学習塾の地理的近接度等についてはほんの2.3%しか回答がなかったのにもかかわらず、実際の塾選択行動となると、圧倒的1位が「近い」という所在地の回答になり、方針納得は5位になってしまっている。つまり、理念と行動が一致していないのである。この不一致の原因は何であろうか。

第1の可能性は、母親が選ぶ場合は方針で選ぶが、子供が選ぶ場合は距離で選んでしまうこともあり得る。そこで、この可能性を検討する為、選択者別に基準の内訳を見たのがTABLE 7である。TABLE 7は、上位2位だけを調べてある。意外なことに、親も子供も近いということを重視して塾選択をしていることがわかる。従って、距離の

TABLE 6 学習塾の選択基準の順位

順位	学習塾の選択基準	反応数	%
1	近い	36	28.1
2	評判	15	11.7
3	友人がいる	14	10.9
	兄弟が通って良かった	14	10.9
5	方針が納得できる	13	10.2
6	知人の勧め	11	8.6
	塾発表進学実績を見て	11	8.6
8	先生が信頼できる	6	4.7
	少人数	6	4.7
10	授業料が安い	3	2.3
11	規模が小さい	2	1.6
	教え方が丁寧	2	1.6
	有名だ	2	1.6
	所属校の生徒がいない	2	1.6
	通っている人に話をきいた	2	1.6
	レベルが高い	2	1.6
17	テキストが権威がある	1	0.8
	規模が大きい	1	0.8
	自宅で塾経営をしている	1	0.8
	他に良い所がない	1	0.8
	教師の学歴	1	0.8
	学校でチラシを配られた	1	0.8
	時間帯が部活と両立	1	0.8

・複数回答を認めているので合計は100%にならない。

条件は必ずしも子供特有の基準ではない。子供特有の基準は、むしろ「友人がいる」という基準であり、TABLE 6の「友人がいる」に回答した14名のうち、11名が子供の採用した基準であった。よって、この第1の可能性は妥当とはいえない。

不一致の第2の可能性は、いわゆる「タテマエ」と「ホンネ」の違いであるかもしれない。日本人は、タテマエとホンネを器用に区別しこの二者の不一致に抵抗が少ないということが、しばしば指摘される。今回もその区別がここにあらわれたのであって、「理想の塾」と尋ねられたらあくまで「タテマエ」を答え、実際は「ホンネ」で選択するというかもしれない。確かに、新井郁男(1982)でも指摘されているように、この種の調査では、タテマエとホンネの著しい差が見られることはしばしばである。^(注4)「理想」という語を使用

したのも、より「タテマエ」を引き出しやすい結果になっているかもしれない。この可能性を確実に検討する為には、「ホンネ」が引き出せるような十分な配慮をしながら再度調査する以外にはな

TABLE 7 選択者別の学習塾選択の基準の差違 (数値は%)

選択者	小学生	中学生	全体
母親が選択	①近い 9.4	①近い 8.6	①近い 18.0
	②評判 3.9	②知人の勧め 6.3	②評判 7.8
本人が選択	①友人がいる 4.7	①近い 6.3	①近い 8.6
	②近い 2.3	②友人がいる 3.9	友人がいる 8.6
母親と本人の相談により選択	(該当なし)	①評判 2.3	(中学生に同じ)
		②近い 1.6	
		塾発表の進学実績 1.6	

い。しかし、理想の塾像を語る時に、学校不信の発言がかなり見られる点、成績向上の要求も出ている点、後の第9節で述べる非通塾者の理想像とに大きな差がある点から考えると、必ずしも、タテマエだけで理想像に回答していたと考えるのには無理がある。又、学習塾は学校と異なりあくまでサービス業であり、年間かなりの高額な授業料を払っていることもあって、親の消費者意識が高いことを考えあわせると、近いという反応がホンネの代表値と考えるのも無理がある。もし「近い」ということだけで選択するのが普通なら、きちんとした教育をやっている学習塾ばかりとは言えないから、通塾満足度も低くなるに違いない。これについては本稿第8節でとりあげる。以上、あくまで推論の域を出ないが、今問題にしている不一致の主たる原因としては、この「タテマエ」と「ホンネ」の差の可能性はそれほど高くないのではないと思われる。むしろ次に述べる第3の可能性が大きいかもしれない。

第3の可能性は、TABLE 6の集計の仕方の問題である。この結果は自由回答の単なる集計である為、すべての選択肢が同じウェイトを持ってしまっている。そこでは、「近い」という項目は、

他の答え方があまりないので反応が集中するが、「方針が納得した」という項目は、具体的に方針を上げていけばいくらでも反応が分散してしまうので、1項目あたりの反応数は減少してしまうのである。だから、単純集計によるTABLE 6 はあまり意味がないことになる。選択条件の各項をよく見ると、そこには主体的に塾の教育の質を判断した回答と、他者依存的な判断と、塾の教育の質のことは考えずに、自分の子供が通うことによ

て生ずる様々な抵抗を緩和するような条件で判断する回答との3種類があるように見える。この調査に於いて確かめたい点は、まさにこの3種がどう分布しているかを、理想の塾の姿との関係で見たいわけであるから、この3分類にTABLE 6 の第11位までを再分類し、集計しなおした。それがTABLE 8 である。(注5)

TABLE 8 を見ると、半数近くが主体的な判断基準によって塾の質を判断していることがわかるが、あいかわらず理想的な塾の反応を考えた場合納得のいく数値ではない。これは、母親だけの選択でなく、子供の選択基準が含まれているからであろう。そういう意味で、母親の選択基準と子供の選択基準を比較したのがTABLE 9 である。この表を見ると、「友人がいる」という基準で学習塾を選んでしたのは、実は子供本人であったことがわかる。FIG.1 は、TABLE 9 の大項目によって親と子の判断の違いを見たものであるが、約4分の3の親は、教育の質を問題にして塾を積極的に選んでいるのに対し、子供が選ぶ場合には、教育の質のことを考えるより、近くでしかも友人が多いというように、通う抵抗が少しでも少ないような所を選んでいくことがわかる。

この結果は、塾の理想像の所の結果と一貫性を持つものと考えて、さしつかえないのであろう。但し、一貫性はあるというものの、その内容は実際の選択となると要求水準が理想像ほど高くなく、しかも「近い」ということがあいかわらず大きな基準であることにはかわりはないようである。

TABLE 8 学習塾選択基準の分析
(基準の順位11位迄)

分 類	選択基準	%
教育の質の判断 (合目的条件)	兄弟が通って良かった	46.9
	方針が納得できる	
	塾発表の進学実績を見て	
	先生が信頼できる	
	少人数	
	規模が小さい	
	教え方が丁寧	
	所属校の生徒がいらない	
	通っている人の話をきいた	
	レヴェルが高い	
他者依存的判断	評判	20.3
	知人の勧め	
	有名だ	
消極的選択(通塾抵抗緩和条件)	近い	41.4
	友人がいる	
	授業料が安い	

TABLE 9 学習塾選択基準の選択者による差異

分 類	母親	子供	全体	
教育の質の判断 (合目的判断)	主体的判断	75.9	24.4	46.9
	他者依存的判断	37.0	11.1	20.3
消極的選択 (通塾抵抗緩和条件)	41.4	51.1	41.4	

・数値は% 複数回答があるため、合計は100%にならない。
・母親と子供では、5%水準で有意差あり

FIG. 1 学習塾選択基準の選択者による差異

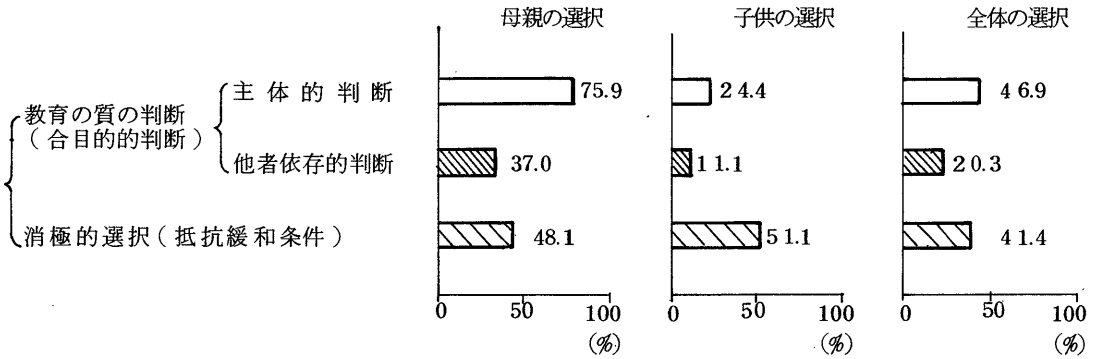


TABLE 10 所属校の生徒の重要性に関する母親の判断

意 見		男 子	女 子	全 体
所属校の生徒の有無は重要な問題	所属校の生徒がいた方がよい	12 (22.6)	18 (24.0)	30 (23.4)
	所属校の生徒はいない方がよい	8 (15.1)	10 (13.3)	18 (14.1)
所属校の生徒の有無は大して重要な問題でない		30 (56.6)	45 (60.0)	75 (58.6)
無 回 答		3 (5.7)	2 (2.7)	5 (3.9)
合 計		53 (100)	75 (100)	128 (100)

数値は実数 ()内は%

6 同じ学校の生徒とは一緒にがいいか

本人が塾を選択する場合、友人と一緒にということはかなり重要な基準であることがわかったが、このことを母親はどう考えているであろうか。母親の判断の中には「同じ学校の生徒がいない」という項目もあり、母親の考え方は必ずしも子供と同一ではない。

そこで「塾を選ぶ時に、自分の子供と同じ学校の生徒が沢山通っているかどうかということとは重要な問題ですか。それとも、どうでもよいことですか。」という質問を母親にし、さらに、重要だと答えた場合には、「同じ学校の生徒と一緒にの塾を選びたいですか。それとも、同じ学校の生徒がいる塾は避けたいですか。又、それはなぜですか。」という質問をした。

結果はTABLE 10の通りである。男女別々に集計してみたが、特に有意差はなかった。所属校の生徒が沢山通っている塾であるか殆どいない塾であるかについては、大半の母親が重要な問題ではないと見ているが、重要視している母親も少なからずある。そして、同じ方がよい母親もあると同

TABLE 11 所属校の生徒の存在に関する母親の意見

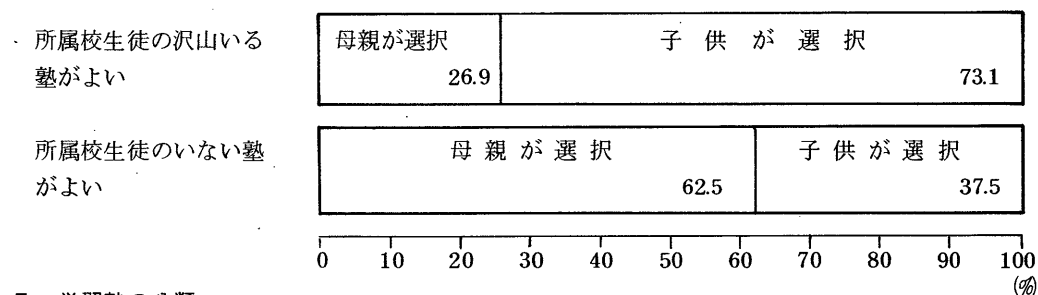
所属校の生徒が沢山通っていた方がよい理由
1) 通いやすい(楽しく通える)
2) 休んだ時に連絡し合える
3) 帰り道が安心(女子のみ)
4) 競争させられる
所属校の生徒はいない方がよい理由
1) 色々な学校の様子がわかり、視野が広がる
2) 本人が自分自身をすなおに表現できる(からかい、うわさの対象にならない)
3) 同一化への圧力がないので本人が自分の信じた行動がとれる
4) 宿題など人に頼らずに自力でやるようになる
5) 所属校の生徒が沢山いれば、結局学校の延長になってしまい、授業中におしゃべりをしたり、行き帰りに道草をしたりするようになってしまうので、学校とは切り離したい

時に、別の方がよいという母親もある。理由として出てきたのはTABLE 11のようなものであった。

この表から見る限り、所属校の生徒がいたほうがよい理由と、所属校の生徒達とは別の塾にした理由とは、質的に異なるように見える。即ち、前者は親が子供に競争させたいということか、通うことの抵抗を緩和しようということを重視しており、学習塾で行われる教育活動に於ける子供の行動や学習環境の質をあまり問題にしていないのに対し、後者は、学校とは質の違う新しい学習環

境を子供に与え、そこで勉強させようというその家庭なりの一つの責極的方针が感じられる。(注6) ちなみに、FIG 2 のように所属校の生徒とは別々の塾がよいと答えた母親の65%が塾を自分で選び、所属校の生徒達と同じ塾がよいと答えた母親の73%が子供に塾を選ばせていた。(所属校生の有無と塾選択の関係は、 χ^2 検定で5%水準で有意に連関が認められた。)この結果は、母親には潜在的にいくつかの類型があることを示唆している。

FIG 2 塾生環境に対する親の希望と塾選択者との関係



7 学習塾の分類

さて、以上見てきたような母親の期待に対して、学習塾は充分に答えているであろうか。一口に学習塾といっても、その形態には様々なものがあり、営利追求型の塾も貢献主義の塾もある。そして一般には、営利追求の方針と貢献主義の方針とは矛盾するといわれる。

この両者が矛盾するという前提に立つならば、そして両者が完全に2分できるものならば、それぞれの学習塾の方針を区別することによって、母親の期待に答えているかどうかを調べることができる筈であるが、極端に営利追求主義の学習塾であっても、これがわかってしまうと顧客の減少を招くので、表面上は貢献主義のように見せかけているのが普通であり、営利追求の程度を客観的に判定するのは通常非常に困難である。

又現在の社会制度の中で、学習塾が完全に貢献主義に徹し続けることは不可能に近い。このあたりの事情は、伊藤忠彦(1982)に論述があるので、少し長くなるが、本論の必要上ここに引用する。(注7)

「第三の教育の場として塾が構想され、そこに教育改革の可能性をみようとしても、大きな問題が横たわっている。それは、〈経営〉上の諸問題

だといえよう。いかなる良案も実践も、その経営上の問題から行き詰まることがあまりにも多い。

塾の経営は、もちろん〈公費〉によるものではない。私立の学校経営には公費による補助があるが、塾にはそれが無い。〈私経営〉として運営していかなければならない。

ということは、簡単に考えても、教師の年齢は確実に上がっていくわけだから経費はかさむわけで、授業料は毎年、値上げせざるをえないわけである。というわけにいかないのなら、教員の数を減らすか、生徒の数を増加するかして乗りきらざるをえない。それとも私立幼稚園のように教員の若返りを常に目指すということになる。教員の首切りもせずに経営をつづけようとするならば、これは企業の当然の宿命で〈拡大〉をしていかなければならない。つまり、同一経営による支店？を出していかなければならない。企業を拡大していかないと、経営はうまくいっていないということになるのである。

事実、進学塾や学習塾は次第に拡張し、系列化が進み〈大企業〉と化している。その結果、系列化の傘の下に生き残るか、それともオヤジ1人で経営する零細企業としての塾、あるいは

副業的・家内工業的な塾として残るか、のいずれかでしかありえないという現状が、問題の所在を規定することとなる。

進学塾や学習塾がすべて公立でなく、公の補助金も受けていないということは、塾に対する考え方の〈必要悪〉の感情の露呈であろうが、進学塾や学習塾以外の〈塾〉に対する場合にも連らなってくる。おけいこごとの塾の場合も、補助金はない。スイミング・クラブの場合もそうである。これがアメリカだったら、当然のように補助金が出る場所である。学校では十分にやれない教育で、しかもさまざまな存在理由が考えられる場合には、アメリカだったら補助金や助成金が出る。激励を受ける。

そうした激励がないとすると、私企業として利潤が上がるような努力を支えとして、経営に励まなければならぬ。時として、破綻がそのあたりから出てくることになる。無理な生徒募集や、指導者への俸給の低さなど、あるいは施設の劣悪さなど、長期の経営見通しが不安だと、どうしても問題が出てくるのである。

そこで、上で指摘されている「塾経営の宿命」をふまえた上で教育の質ということを中心に考えると、質の保たれている学習塾は

- ① 優秀な教師を集め施設を完備しながら、適度に拡大し続けている塾
- ② 優秀な指導者に自己犠牲を押しつけ続けている塾

質の保たれていない学習塾は、

- ③ 優秀でない指導者、施設の劣悪さ、無理な生徒募集によって存続している塾
- ④ 人件費、施設費などに経費をかけずに、拡大だけしている塾

ということになるであろう。この点が外から判定できればよいが、塾がこの点を一般に明らかにするとは思えないので、本稿の目的である親の期待に答えて質を保っているかどうかを科学的に論ずることは不可能に近い。^(注8)

しかしながら、藤沢(1985)で述べられているように、授業形態に着目すると授業の質が比較的判定しやすい。^(注9)

講義中心授業を行っている塾なら、少くとも講義ぐらいはできる教師を置いているだろうから、全くの素人を採用して人件費をおさえている可能

性が低く、ある程度の質は保たれていると想像できる。全くの素人を教師としてすえる為には、その教師の力量不足分を教材やシステムでカバーすることになり、必然的に演習中心かテスト中心にならざるを得ない。問題の答え合わせだけであれば、正解さえ与えられていれば、その時間を授業らしく見せかけることが可能だからである。

但し、演習中心やテスト中心であれば即ち教育的質が低いと断定することには無理があろう。テストはあくまで診断にすぎないが、その結果を分析し生徒の弱点が完全に補われていくのであれば、テスト中心でも効果はあるであろうし、演習中心であっても、答え合わせだけでなく、生徒の解答の過程を分析し指導を行うのであれば、効果もあるかもしれないが、そこ迄の事後処理を適切に行っている塾がどれだけあるかは不明である。又、新しい單元にはいった時に、テストや演習中心で知的好奇心を刺激するような導入が行えるかどうかは疑問である。

従って、講義中心だから即ち教育的質が高く、演習やテスト中心だから質が低いとは断定はできないものの、授業形態は、その塾の質的傾向を把握するための大まかな目安にはなるものと思われる。

今回の調査では、通塾者が128名であったが、重複の場合や、母親が授業形態を全く知らない場合もあり、103の学習塾のみ分類が可能であった。藤沢(1984)の分類基準に従って集計した結果が、TABLE 12である。今回の調査では、学習法指導塾は1つもなかった。^(注10) 結果は、講義中心型15.5%、演習中心型68.0%、テスト中心型16.5%であった。演習中心テスト中心の合計は84.5%であり、先程述べた質との関連で考えると、教育的質が低い学習塾の方が圧倒的に多いことが推論され、本稿第3節で述べた、母親の考える学習塾の像にあらわれているような期待に、学習塾業界がどれだけ応えているかは、著だ疑わしい結果になった。

8 通塾満足度

それでは、母親の通塾満足度はどの位であろうか。満足一や満足一何も感じない一や不満一不満、の5段階で反応を集計した結果に、他の反応「本来は通わせたくない」「もともと何も期待しない」をあわせてまとめたのがFIG.3である。

TABLE 12 授業形態による学習塾の分類とその分布

授 業 形 態		名 称	数	百分率	
講 義 中 心	原則重視型の講義	学習内容・方法の指導と家庭学習管理	学 習 法 指 導 塾	0	0
		学習内容の詳説と補助演習	解 説 演 習 塾	15	14.6
	項目暗記型講義と補助演習	スパルタ特訓塾	1	1.0	
演 習 中 心	教科書準拠（要点解説＋演習）	教科書補習塾	26	25.2	
	問題集・ワーク準拠（演習＋答合わせ）	問 題 演 習 塾	44	42.7	
テ ス ト 中 心	一 斉 授 業	テ ス ト ＋ 解 説	テ ス ト 解 説 塾	4	3.9
		テスト＋解説＋発展学習	受 験 請 負 塾	8	7.8
	個 別 指 導	対 人 解 説 あり	個 人 指 導 塾	4	3.9
		対 人 解 説 なし （テスト進級方式）	マイペース進級塾	1	1.0
合 計			103	100	

今回の調査対象となった学習塾には学習法指導塾がなかった為0になっているが、存在はしている為、分類としては挙げてある。

TABLE 13 学習塾に対する不満一覧表

- ・営利目的の姿勢が時々見える
- ・教師が子供の特性を適格に把握していない
- ・教師が若い
- ・教師が口先だけで実行力に乏しい
- ・進度が遅い
- ・進度が早い
- ・科目が足りない
- ・時間数が足りない
- ・教育方針が良くない
- ・個人指導の時間がない
- ・のんびりしている
- ・人数が多い
- ・成績が上がらない
- ・授業料が高い

これまでの本稿の論の流れからすると、塾に対する満足度は低いことが予想されるが、結果は高い満足度を示している。又、やや不満という反応はなく、不満のある母親はそれが大きな不満という反応になり、結局満足か不満かという形の極端な傾向を示している。不満の内容としてあがった

のをまとめたのが TABLE 13 である。

満足しているとの反応が多かったが、これは、必ずしも理想達成度という意味ではなかったかもしれない。今回の調査では、付表でわかるように、質問全体の後の方で塾の理想像を尋ねており、質問全体の後の方で塾の理想像を尋ねており、満足度の質問は前半である。理想像の質問直後に満足度を尋ねた予備調査では、満足度が極端に低い結果になったので、本調査では中性の反応を得る為意図的に満足度の質問を前に持ってきた。その結果、低い要求水準のまま反応があらわれたものと考えられる。母親の中には、「子供が喜んで通ってさえすれば、それだけで満足です。」と答えたケースがあったが、この反応は理想像と比較した満足度でないことを表わしている。

本調査実施の時点で、これだけ高率の満足度が得られることが調査前に予測できなかった為、なぜどのように満足であるか迄尋ねることをしなかったが、更にこの点は、徹底した調査が必要であると思われる。^(注11)

但し、今回の結果も連関分析をすると、いくつかの事実をそこから読み取ることができる。

第1に、塾生環境に対する親の希望と学習塾満足度の関係はどうかであろうか。第6節で見たよう

FIG. 3

通っている学習塾に
満足しているか

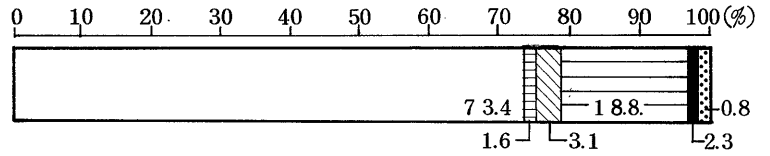
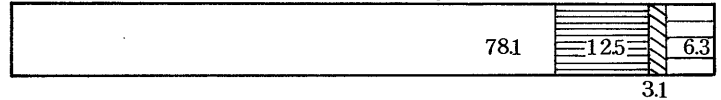
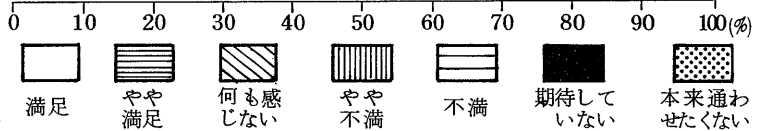
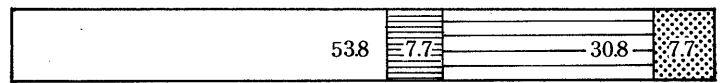


FIG. 4 塾生環境に対する親の希望と学習満足度の関係

所属校生徒の沢山いる塾がよい



所属校生徒のいない塾がよい



に、自分の通う学習塾に所属校の生徒達がいることを望む母親と、所属校の生徒達とは別の塾に通わせてがっている母親があり、後者の方が前者に比べ教育に対する意識が高い^(注12)という傾向を示していたので、この両者には満足度に差があることが予想される。

そこで、この両者の満足度を集計した所、結果はFIG. 4の通りであった。やはり、教育に対する意識の高い親の方が、塾に対しては、不満が多いという傾向が出ている。(百分率の差の検定5%水準で有意差あり)これは、こういう母親がより学習塾の実態を見抜いていることを意味しているかもしれない。この結果も、母親に潜在的にいくつかの類型が存在することを示唆している。

第2に、どういう所に着眼して学習塾を選択したかということと、満足度には関係があるだろうか。ここでは、代表的な4つの場合で調べることとする。即ち、①主体的判断条件のみで、母親自身が学習塾を選択した場合、②他者依存的条件のみで、母親自身が塾を選択した場合、③「近い」というだけの理由で、母親自身が選択の場合、④「友人が多い」という理由だけで、子供が塾を選択した場合の4つである。①の場合は、教育の意識が比較的高いと考えられ、実態の把握がよくできるので、満足度はそれ程高くないと予想される。②の場合は、評判で選ぶのは、母親自身識別力に自信がないためであろうから、他の人が良いと言えれば良いと思うということで、満足度はかなり高くなるであろう。③の場合は、そもそも塾の質を全

く判断せずに選択しているわけであるから、子供を通わせたと所期待外れという場合があり、満足度は最も低くなるであろう。④の場合は、塾に対する期待は初めから低く、子供が友人と一緒に通えるということで選んでいるのを認めているわけであるから、満足度は比較的高いであろう。

結果は、FIG.5の通りであった。どの場合も予想通りの結果が得られた。この結果は、本稿で見てきた諸結果とも比較的一貫性があるように思われる。

第3に、学習塾に対する満足度は授業形態によってどう変わるだろうか。第7節で述べたように、営利追求の程度が著しい場合には演習中心授業にして人件費を抑えるであろうから、問題演習塾に子供を通わせている親は満足度が低いであろう。又、講義の可能な教師のいる学習塾は、そうでない塾と比べて満足度は高くなるのが予想される。

そこで、解説演習塾と問題演習塾と教科書補習塾の3者に子供を通わせている母親を選び出し、その満足度を形態別に集計したのがFIG.6である。これも予想通り、問題演習塾に対しては、解説演習塾に比べて不満がより大きかった。教科書補習塾に対しては満足度が高い傾向を示しているが、これは、親の期待が教科書を教材として使用することを条件としているため、その条件さえ満たしていればそれで満足ということになったと考えられる。

以上、通塾満足度は全般的に高いものの、これは必ずしも学習塾の教育の質の高さを示している

FIG. 5 学習塾選択基準別の母親の満足度

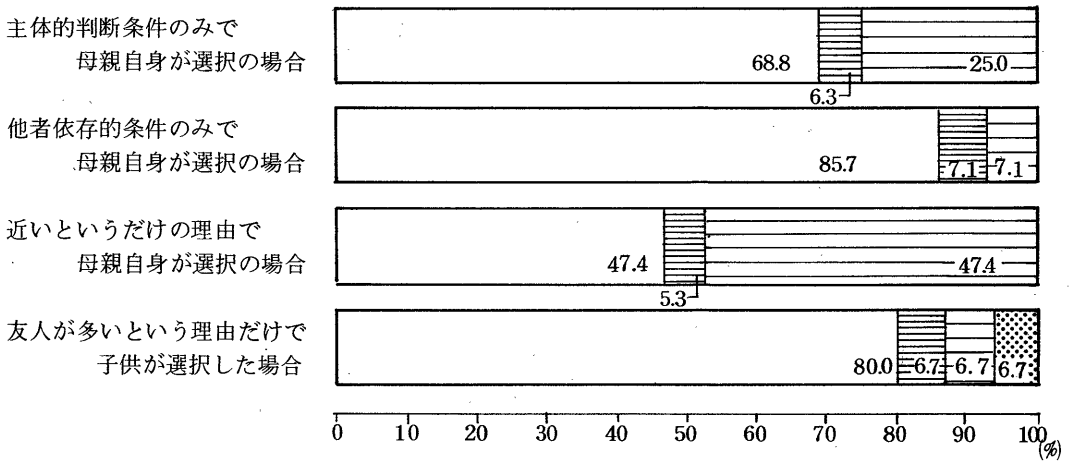


FIG. 6 学習塾指導形態別の母親の満足度

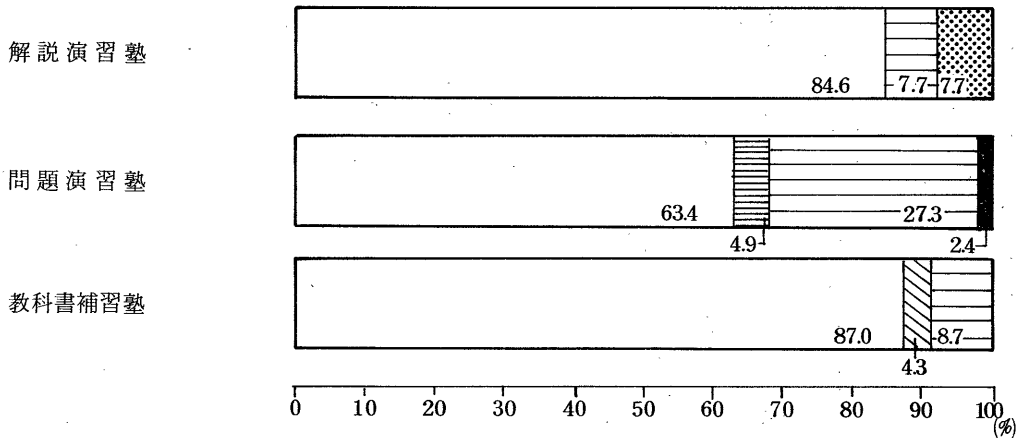
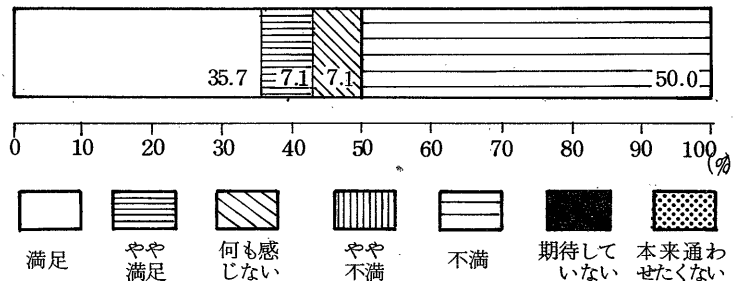


FIG. 7 速効性重視の母親の満足度



わけではなく、教育に対する意識の高い親は学習塾業界に依然として根強い営利追求姿勢に不満を示していることもあり、全般的な満足度の高さは一般的要求水準の低さに支えられていると

も過言ではない。

では、学習塾は成績上昇の為の促成訓練機関としての期待には応えているのであろうか。学習塾の理想像として、成績上昇のみを回答した母親を

選び出し、その満足度を集計したのが Fig.7 である。これまで集計した満足度としては最低になっている。不満の理由としても、ほぼすべて、成績が上がらない為と回答されている。

本来、学業成績として測定される学力の構成要因は単独ではなく、又成績が停滞している原因にも個人差があるので、ある一定の教育方法を実施したからといって、一律に成績が上昇することなどあり得ない。成績上昇を実現するには、親の養育態度、本人の生活習慣、学校の授業参加態度等すべての側面にわたって問題点が指摘され、改善

されなければならない。これは途方もない労力を必要とすることで、およそ営利追求にはそぐわない行為である。従って、学習塾に対して速効性を期待する方が誤りであって、不満が多いのは当然である。成績が上昇して満足している家庭の場合は、たまたま本人に欠如している部分はその学習塾で補強されたか、適切な診断がその塾で与えられ、関係者全員が協力して対策を実行したかのどちらかであろう。そして後者の可能性は、非常に低い。

TABLE 14 非通塾者の母親の考える学習塾の理想像

分類	項目	子供の段階					
		小学生	中学生	全体	小学生	中学生	全体
指導	A 親身の個別対応の重視	1. 子供がわかるまで教える					
		2. 能力別に指導の仕方を変える	14.3	14.3	14.3		
		3. 個人指導の時間がある		9.5	6.3		
		4. 少人数で指導の目が行き届く	4.8	7.1	6.3		
		5. 個人個人の弱点補強をしてくれる					
		6. レベルが自分の子供に合っている					
		7. 子供の個性を尊重して指導してくれる					
		8. 教師中心でなく一人一人生徒の現状を把握しながら指導する					
		9. 先生が子供の話をよく聞いてくれる					
		10. 子供の疑問にいていねいに答えてくれる					
		11. 授業のアフターケアを責任をもってやる					
		12. すべてをまかせられる(他に家庭教師など不要)					
		13. 子供と相性が合う					
		14. どんなレベルの子供にも合う				19.0	31.0
方針	B 人格形成と過程の重視	15. 学習意欲を高めてくれる	4.8		1.6		
		16. 子供が喜んで通うようにしてくれる					
		17. 学習順序や説明がわかりやすいよう配慮されている		9.5	6.3		
		18. 学習の楽しさを教える	4.8	2.4	3.2		
		19. 適切な学習法が身につく	4.8		1.6		
		20. 個人差を理解し、人間性を大切に育てる					
		21. 子供の個性や能力をうまく引き出す		2.4	1.6		
		22. テストは必要最少限にとどめ、競争心をあおらない					
		23. 勉強を好きにさせる					
		24. 本来の学力を付ける					
		25. 学習内容を人生に於いて主体的に活用できるようにする					
		26. 子供の知的好奇心を刺激する					
		27. 勉強を通して人間としての生き方を教える					
		28. つめこみ教育をしない					
		29. 精神力や自主性を養う	4.8		1.6		

分類	項目	子供の段階			子供の段階		
		小学生	中学生	全体	小学生	中学生	全体
C 速効性と 結果の 重視	30. 自律性を養う						
	31. 受験勉強の機会を活かして心を鍛える	4.8		1.6	2.38	1.43	1.75
	32. 学校の成績が上がる, 教科書中心	9.5	16.7	14.3			
	33. 受験で成功させる, 受験技術の指導	4.8	2.4	3.2			
	34. テストが頻繁にあり, 絶えず結果がわかる	4.8	4.8	4.8			
	35. 子供に厳しく接し, 言うことを聞かせる						
	36. 一流校合格の実績がある						
	37. 多人数の中で競争心をあおる						
形 D 授業 計画 E 教師 F その他	38. 学校の定期考査で点がとれるよう準備する		2.4	1.6	1.90	2.62	2.38
	39. 授業計画が学校の勉強にも受験準備にも合うように立てられている						
	40. 学校と進度が同じ						
	41. 学校より進度は早目						
	42. 学校より進度は遅目						
	43. 授業計画がきちんと立てられている						
	44. 学校のように型にはまらず授業計画が臨機応変						
	45. 教師が熱心, 真剣(態度)		2.4	1.6			
態	46. 教師が優秀(能力)						
	47. 教師が探究心旺盛(資質)						
	48. 熟練教師が多い(経験)						
	49. 充分設備が整っている						
雰 囲 気	50. 色々な行事がある		2.4	1.6			
	51. 受験情報が豊富		2.4	1.6			
	52. 営利目的でなく貢献目的の設立である				0	7.1	4.8
	53. 質問しやすい雰囲気						
個 人的 都 合	54. 厳しさ, 易しさの度合いが適度				0	0	0
	55. 伸び伸びと勉強できる雰囲気						
	56. 授業料が安い						
塾 の 否 定	57. 自分の家に近い		2.4	1.6			
	58. 夜遅くならない				0	2.4	1.6
	59. 塾などない方がよい	4.8	2.4	3.2	4.8	2.4	3.2

9 通塾者の母親と非通塾者の母親の理想像の違い

今回の調査では、通塾者の母親ばかりでなく非通塾者の母親にも理想の塾の姿を尋ねた。その結果が TABLE 14 にまとめてある。TABLE 4 と比較しやすいように項目は同一にしてある。

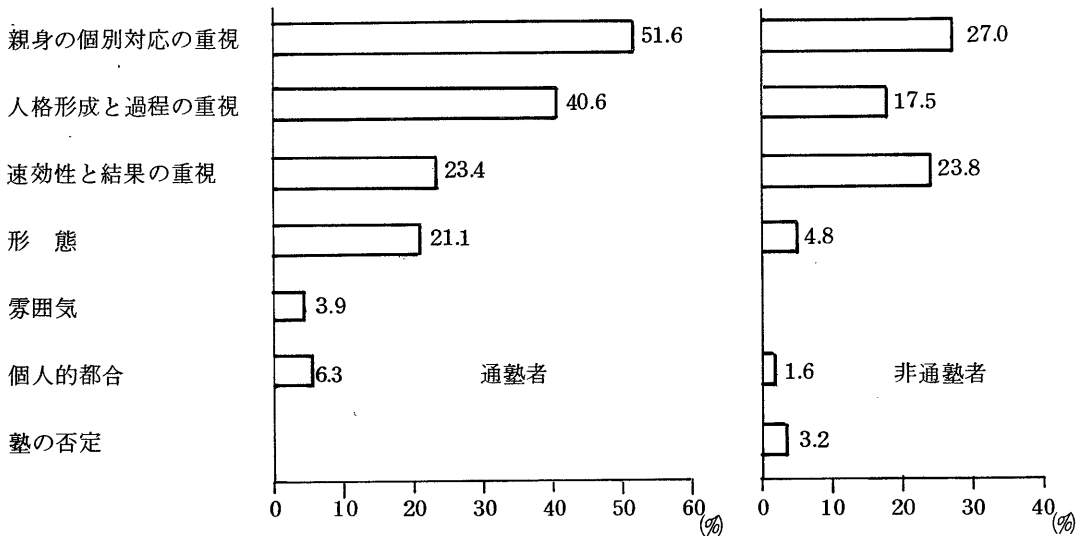
通塾者の母親の回答の時は反応も沢山あり、項目数が人数の146.9%になったのに対し、非通塾者の母親の場合「よくわからない」ということであまり回答は得られず、項目数も人数の77.9%になった。回答が少なかったのは、通塾家庭に比べて

塾に対する関心が低いか、或いは学習塾に対してあまり好意的でないということのあらわれと見ることができのかもしれない。

又、回答の質に差があるかどうかを見るため、大きな分類毎の百分率を求めてグラフにした比較したのが、FIG. 8 である。

FIG. 4 からわかる、通塾者と非通塾者の母親の共通点は、どちらの母親も親身の個別対応を一番望んでいることと、速効性や結果を重視する回答がどちらの場合でも23%前後となっていることである。又、両者で有意な差があるのは、人格形

FIG. 8 通塾者と非通塾者の学習塾理想像の比較



成や過程を重視した回答の率である。即ち、通塾者の母親は非通塾者の母親と比べ、学習塾を人格形成のための機関と見做す率が高くなっている。

この差の原因は何であろうか。

〔信念変更仮説〕第1の可能性は、学業成績に関する考え方が、自分の子供を塾に通わせるようになって変わるといことであるかもしれない。

即ち、学習塾に通う前は「競争心を煽ったりして強引に勉強させれば、子供の成績は簡単に上がる」とか、「受験技術さえ教え込めば入試で成功する」といった信念を持っていたのが、実際に自分の子供を塾に通わせてみると、「強引に勉強させようとすればする程、子供は反発して勉強嫌いになる」とか「受験技術ばかりいくら教わっても、入試で成功するとは限らない」というように、現実直面に初期の信念を変更せざるを得なくなり、経験的に「子供は自分が興味を持ったことには努力しようとする」とか「意欲を持って自主的に学習すれば、学習内容がより修得されやすい」とか、「機械的に暗記するより、意味を理解した上で暗記の方が保持率が高い」といった傾向に気付くようになるのかもしれないということである。

従って、この場合性急に結果を求めるよりは、過程を重視する方がはるかに効果的であることがわかるので、その結果、通塾者は塾に対して過程を重視する方針を期待するようになるのかもしれない。

ない。

〔潜在類型仮説〕第2の可能性としては、もともと学習による人格形成を重視するタイプの方が、より学習塾を選びやすいという事があるかもしれない。即ち、人生に於ける学習の意義を強く認識している為、学校教育に多くを期待してみたものの、現状が満足できる状態ではないということによって学校以外に本来の教育機関を求め、その結果、自分の子供を学習塾に通わせるようになる。これに対し、人生に於ける学習の意義をあまり認識していない親は、学校に対しても大した不満を持たないので、学習塾に通わせる必要性を感じないということになる。

〔学校信頼仮説〕第3の可能性は、学習による人格形成を重視するタイプの占める割合は、通塾者の母親でも非通塾者の母親でもかわらないが、所属する学校が人格形成の為に充分機能していると信頼できる母親は、わざわざその為に自分の子供を学習塾に通わせる必要性を感じないのかもしれない。従ってもし通わせるとしたら、それは全く受験目的であるのだから、塾のあるべき姿として、人格形成の反応が出にくいとも考えられる。

〔タテマエ反応仮説〕第4の可能性は、今回の調査に於いて通塾者の母親が、非通塾者の母親に比べ、よりタテマエで回答したこともあり得る。通塾者の母親にとって、学習塾の理想像を答えることは、自分の教育姿勢を明らかにすることにな

ってしまうから、どうしてもタテマエを回答しがちになる。それに対し、非通塾者の母親の場合は自分が通塾という方針をとっていないわけであるから、通塾行為を合理化する必要はない。そこで、タテマエとホンネを区別することもなく、マスコミ等によって作られた。学習塾のイメージを回答したのかもしれない。

この他にも色々な可能性があると考えられるが、どの仮説が正しいかは、さらに発展した調査の結果を待たねばなるまい。

いずれにせよ、通塾者の母親の持っている学習塾の「意味」と、非通塾者の母親の持っている学習塾の「意味」の違いが、この調査にあらわれてると言えよう。そして、普通通塾選択には父親があまり関与していないという事実とつき合わせると、今述べた学習塾に対する「意味」の差は、父親と母親の塾に対する「意味」の差に一致することも予想される。

結 語

以上、今回の調査によりかなり沢山のことがわかったが、結果は単に様々な母親が散在しているというよりは、母親にも教育観によっていくつかの類型があることを示唆していた。この調査は類型を示すために計画されたものではないので、決定的なことは言えないが、学校信頼型・教育無関心型・教育主導型といったタイプがあるかもしれない。そして、塾選択という行為一つに焦点をあてた場合にも、考え方の違いが行動様式としてあらわれているようである。

従来、教育熱心な母親は学校中心の教育観を示していたのに対し、学校中心でない考え方が増加していることは、(経済企画庁発行の国民生活白書にも示されている。^(注13)例えば、学校での勉強と、学習塾での勉強とでどちらが役立つかの問いに、昭和51年度調査では「学校」が72%、「学習塾等」が9%であったのに対し、昭和57年には「学校」が53%、「学習塾等」が12%と変化しているのである。今回の調査結果もこの線に沿ったものと見ることができよう。

今回の調査では、いたる所に学校教育に対する不信感が見られ、学習塾を活用しながら対応策を模索している母親の姿が浮き彫りにされた。そこでは、学習塾は単なる受験準備機関や学校教育を

補完する所ではなく、勉強を通しての人格形成の為の機関という意味を持っている。荒廃が叫ばれて久しい学校に見切りをつけ、面倒見のよい塾を新しい学習環境として、思春期という大切な時期にいる子供達に与えようとしている母親の姿がそこには見られる。そろそろ自立の道を歩み始めている子供に対して、親はもはや強く指導することができない為、選択が可能な学習塾に自分の方針を託すのである。

しかしながら、現在の学習塾業界は、親の期待にもかかわらず、質の高い教育を提供している塾がごくわずかである。親が教育の質を判断しにくいことを良いことに、営利追求に専念している塾が多い。従って、母親の家庭主導型の教育理念は、現在のところ十分に達成されていないことがわかった。

さて、本研究では塾選択行動にのみ焦点を絞り、母親の教育観とその行動を見てきたが、類型を見たりする為には、さらに色々な側面からの調査が必要になるであろう。

要 約

本研究では、学習塾選択がどのようになされているかを、小中学生を子供に持つ母親192名を対象に、面接によって調査した。結果は次の通りである。

自分の子供の教育の方針を学校に任せきりにせず、みずからが主導権を持っていきたいと考える層が母親達のあいだに出てきている。しかし、子供が自立しはじめる年齢に達すると、必ずしも子供は親の思い通りにはならない為、自分の方針に合った学習塾に子供を通わせることによって、教育目標を達成させようとしている。

彼等の教育目標は「学習を通じての人格形成」のように理想が高いが、現実に塾選びをする段になると、営利追求型の学習塾も多く、塾の教育の質の評価が極めて困難である為、学習塾に対する要求水準はそれ程高くない。全般的に見ると、学習塾に対する満足度はかなり高いが、それでも教育に対する意識の高い親にとっては、方針を検討した上で塾を選んでみても必ずしも満足とは言えないようである。

中には学習塾を子供に選択させる親もあり、この場合子供は友人が在籍している所を選びやすい。

こういった母親は、教育に対する意識はそれ程高くなく、子供が喜んで通っていれば、それで満足している場合が多い。

又、成績上昇の為の促成訓練機関としての役割や、受験技術指導機関としての役割を学習塾に期待する母親も約2割強ある。しかし、この期待にも学習塾は充分応えておらず、特に、成績上昇のみを期待する母親の塾に対する不満度は最も高い。

学習塾の授業形態としては、問題演習型の塾が最も多い。これは教育効果の為というよりは、むしろ経営効率の為と考えられ、母親の不満も大きい。

従って、子供の教育を学校任せにせず、親が教育の主導権を持つとする新しい意識が生まれつつあるものの、なかなか実現されていないのが現状である。

注)

- 1) 面接は、昭和60年度跡見学園女子大学の教職課程の科目である「教育心理学」受講学生が分担して行った。
- 2) 1～6の中での重複や7～21の中での重複はあったが、両者にまたがっての重複はなかった。
- 3) 本論文第8節で述べられる、学習塾に対する満足度の高さを考慮に入れると、この可能性は極めて低い。
- 4) 新井郁男(1982)「学校体系の単線化による高学歴志向強化」、稲村博・小川捷之(編)、[塾]共立出版 P 102～111。
- 5) この分類では「同校生徒がいない」を主体的判断に入れ、「友人がいる」を抵抗緩和条件に入れている。これについては第6節を参照のこと。
- 6) TABLE 8で「友人がいる」を消極的選択とし、「同校生徒がいない」を教育の質の判断に分類したのは、このためである。
- 7) 伊藤忠彦(1982)塾の経営と企業化の問題、稲村博・小川捷之(編)[塾]共立出版
- 8) 一般に、商品が消費者の要求に合っており良質であればよく売れるようになるのが普通であるが、これは消費者(支払者)が質の判断が可能な場合に限られる。学習塾の場合、支払者である母親とサービスを受ける側である子供が同一でない為、母親は間接的にしかサービスの質が判定できない。さらに、教育の効果は普通すぐにはあらわれるわけではないし、本当に質を判断しようとするればかなりの専門的知識が必要である為、ますます教育の質の判断が困難になる。

その結果、本文③、④のような塾の存在がこちらで指摘されるわけである。教育に関しては全く素人を「にわか教師」として採用している例もかなりある。従って、質の悪い機関が淘汰されるという現象が起こっていないのである。

- 9) 藤沢伸介(1984)、学習塾の形態とその分類教育総合研究 1, 1-5。
- 10) 調査対象に現れなかっただけで、現実には存在が確認されている為、分類項目としてかかげてある。
- 11) この点については、別の機会に再度言及する。
- 12) 「教育に対する意識の高さ」という表現を操作的に定義することは、困難であるが、ここでは「教育環境を評価するにあたり、成績上昇のことだけを考えるのではなく、他の人格的測面のことも含めて考えるような、視野の広さ」という意味でこの語句を使っている。
- 13) この件に関しては、昭和58年版「国民生活白書」P. 166～P. 171に言及されている。そして、「最近では学習塾等での勉強にも、上級学校への受験を目指したもののばかりでなく、その他の目的を含め、何らかの意義を認める親がやや増えているといえよう。」(P. 169)との指摘もある。

(APPENDIX) 質問項目

1. お子さんを学習塾に通わせていますか。
2. (1で「はい」と答えた人のみ)
 - a) 塾の名称は何といいますか。
 - b) 通塾時間はどの位ですか。
 - c) 交通機関は何を利用しますか。
 - d) 授業料は月額いくらですか。
 - e) 授業形態はどのようになっていますか。
(TABLE 12 の分類を尋ねる)
 - f) 主として誰がその塾を選びましたか。
 - g) その時の選択基準は何ですか。
 - h) 現在の塾には満足していますか。
(満足一やや満足一何とも言えない一やや不満一不満 の5件法)
 - i) (不満の場合)それはどのような点ですか。
 - j) 塾を選ぶ時に、お子さんと同じ学校の生徒

が沢山通っているかどうかということは、重要な問題ですか。又、もし重要だとすれば、沢山通っていた方がよいのですか。それとも同じ学校の生徒はいない方がよいのですか。

3. (1で「いいえ」と答えた人のみ)
それは何故ですか。
4. 現在のお子さんにとって、どんな学習塾があれば、最も理想的ですか。
5. お子さんに家庭教師をつけていますか。
6. (5で「はい」と答えた人のみ)
 - a) 家庭教師はどんな人ですか。
 - b) 授業料は月額いくらですか。
 - c) 家庭教師をつけているのはなぜですか。
 - d) (a)で大学生と答えた場合)
なぜ大学生の家庭教師にしたのですか。

(6の回答は、数が少なかった為本稿では結果からはずしてある。)